

毛沢東 (一)

故郷、家族と少年時代

中屋敷 宏

一、故郷と家系

毛沢東は一八九三年十二月二十六日、湖南省湘潭県韶山沖のごく普通の農家に生まれた。韶山沖は南嶽七十二峯の一つである韶山の下に広がる南北五キロ、東西三・五キロの細長い村である。韶山は古代の帝王舜の伝説とその美しい風景で有名な山である。韶山には舜が南巡の間この地に到達し、そびえ立つ山々と深い谷の間で、黃帝時代さながらの素朴な生活を営む人々の姿を見て非常に喜び、皇妃と大臣達をつれて韶山に登り、幽雅な「韶楽」を奏し、その「韶楽」の響きは三日にわたり山々にこだまし続けたという伝説が残されている。また白雲の中に青々として吃立する氣勢雄壮な「韶峰聳翠」（緑にそびえる韶峰）や紅褐色の泉水の流れである、「胭脂古井」（紅い井戸）などの韶山八景を持つ景勝の地でもある。このような韶山の麓に広がる韶山沖は、美しい自然に恵まれた風光明媚、山紫水明の地であった。ある著書は、韶山沖の美しい自然とその四季折々に変化する自然の様子を次のように描写している。

ここは郡山に抱かれた曲りくねって起伏する細長い谷である。山には松、柏、杉、楓が生い茂り、その中に郡生する青竹がまじっている。毎年春になると百花が一斉に花開き、青々とした山に華やかな五色の色彩を点綴する。

谷からは、清らかな泉が湧き出し、曲がりくねった小川となり、さらさらと音を立てながら昼夜を分たず流れている。小川の兩岸に成長した青々とした木々と緑の枝葉は、清冽な流水と交々照り映えて、景色は非常に秀麗である。

この風光明媚な韶山沖には、この大地にへばりつくようにして六百戸余りの農家が点在していた。しかし、彼等の生活は周囲の美しい自然とは裏腹に、決して楽なものではなかった。夜明けとともに田畑に出て働き、日没とともに家へ帰るといふ労働に明け暮れる生活であったが、家計にゆとりを持たず、少なかった。韶山沖に伝わる民謡は、この村の人々の生活の有様を次のように歌っている。「韶山沖、長くて長い。柴刈りと労働で暮らしをたてる。鶏が暁を告げぬ前に車は音をたてて出かけるが、翌日に半合の米を残すこともできない」「韶山沖、沖に沖が連なる。十軒のうち九軒は貧しい。韶山沖に嫁してくる女はなく、芋を食って一生を過す。」（沖とは山地にある平地のこと）

韶山沖に伝わる民謡は、その住民達の貧しく、きびしい学働の生活を伝えている。しかし、それは必ずしも韶山沖が中国の他の農村に比べて特に貧しかったことを意味するものではない。「湖広熟すれば天下足る」という言葉がある程に高い生産力を誇った湖南省である。この豊かな湖南省の一農村である韶山沖も、中国農村の宿命である慢性的貧困からまぬがれるものではなかったということである。韶山沖は中国農村のごく普通の村落の一つであったのである。また外界から相対的に孤立した、一つの完結した小世界を形成するという意味でも韶山沖は典型的な中国農村の一つであった、県都湘潭から九十里（一里は約〇・五キロ）、徒歩でまる一日を要する距離にあり、省都長沙ともなると百八十里、一日かけても徒歩では行けず、一日歩いて更に船に乗らねばならなかった。鉄道や通信手段が全くなく、幹線道路も整備されていなかった当時にあつては、韶山沖の人々は余程のことがなければ、村の外に出ることはなく、自分が生まれた村落の中で一生を過したのである。外界の情報も唯一の伝達手段である人々の口を通して伝えられてきた。清朝皇帝の布告ですら、役人が村へやって来てまず人々を集めて読みあげ、その後貼りますという形で伝えられたのであった。外的世界の大きな激動も、ここには遠い木霊のようにしか響いてこなかった。この村落は太陽が没するとともに、山懷に抱かれるようにして漆黒の闇の中で深い眠りの中に落ちていったが、村人達の意

識も同様に深い眠りの中にあつた。毛沢東が生まれてから十七才になるまで生活した故郷韶山沖とは、このような典型的な中国農村の一つであつた。彼は厳格な父の下で幼時から田畑に出て、村人と同じように農作業に従事した。農民の労働こそは、毛沢東が最初に体験した意識的な生活体験であつた。

毛家はこの韶山沖に定住しておよそ五百年の歴史を持つ旧家であつた。初代の祖先毛太華はもともと江西省の農民であつたが、朱元璋の反乱軍に身を投じた人物である。朱元璋が明朝を建てるとに及んで、毛太華は大將傅友徳に従い「百天長」（現在の中隊長）の身分で、雲南に遠征する。そしてそこに留り現地の女性と結婚し四人の子供をもうける。年老いて歸郷を申し出て、長年の功によって許され、彼は妻と長男と四男を連れて歸郷する。そして数十畝の地を与えられて住んだのが、湖南省湘鄉県城北門外の緋橋である。数年後、毛太華夫妻が死去した後、長男毛清一と四男毛清四は再び転居して移り住んだのが、湘漂七郡七甲、即ち今日の韶山沖である。それから毛沢東まで二十代、約五百年にわたつて、この地に住み続けてきたのである。言うまでもなく代々の農民である。それも地主でも裕福な農家でもなく、ごく普通の農民であつた。

この毛家には七代が初めて制定し、その後数回にわたつて修訂された族譜が伝えられている。この中に記載されている家訓十則、家戒六則は、代々にわたつて毛家の人々を律してきた精神をよく示している。家訓十則とは次のようなものである。一、培植心田（立派な心を養う）二、品行端正、三、孝養父母、四、友愛兄弟、五、和睦郷親、六、教訓子孫、七、矜憐孤寡（孤児、未亡人という恵まれぬ人に同情する）八、婚姻随宜（婚姻は適宜に従う）九、奮志芸窓（学問芸術に志を奮う）十、勤務本業。家戒六則とは次のような内容のものである。一、戒遊蕩、二、戒賭博、三、戒爭論（特に訴訟は費用を要するのでやってはならぬ）四、戒賭盜、五、戒符法（不詳）六、戒酗酒（酒乱）。

この家訓、家戒を貫く精神は、一見して解る通り儒教道徳である。中心にあるのは孝悌の精神による人格形成であり、

また近隣の人々との和睦親和である。そして勤労にいそしみつつ真面目に、そして誠実に生きることが求められている。品行方正に生き、身をもちくずす原因となるような行為は厳しく禁じられている。道徳的に正しい人間であれ、という強い叫びこそは家訓の基調にある精神である。しかし、それだけにとどまらず、人々には学問、芸術の世界に志を奮うことが求められている。先祖代々の家業は農家であるが、そこに安住することなく、より高い世界への飛躍が求められているのである。このような向上心は事実、毛一族にはあったようである。毛一族からは何人もの知識人を輩出している。毛沢東の私塾の先生であった毛宇居、この地方では珍しい「秀才」であった毛麓鐘は、ともに一族の伯父に当る人物である。そして毛沢東の父毛順生も、家は没落しかかっていたが、二年間は私塾の教育を受けている。毛一族にあるこの学問尊重の気風なくしては、革命家毛沢東は生れることはなかったであろう。

毛沢東の父も祖父も農民であり、毛家は代々の農家であったが、その家系には修身齊家を基軸とした堅固な道徳的精神と、より高い世界を目指す向上心とが脈々と流れていた。多くの農家が学問による上昇の夢を実現できないでいる中で、毛一族にはそれを実現しようという意欲があり、毛沢東にはそれを現実化する条件が恵まれた。その事は毛沢東の大きな幸運と言わねばならないであろう。

故郷や家系は、個人には生存の先天的条件であり、自らの意思で選択することはできないが、個人の運命には大きく影響を及ぼす。そして、それらは個人の中に長く生き続ける。毛沢東における韶山沖も、彼の肉体と精神の中に生涯にわたって生き続けている。彼のあの芒洋とした土の香りのする風貌は、都市の知識人の家庭で成長した人間のそれとは全く異質なものであり、まさに韶山沖で成長した農民のそれである。そしてあの頑健でエネルギーな身体は、韶山沖の厳しい農業労働の中で鍛えあげられたものである。毛沢東が生涯最も愛したスポーツである水泳は、彼が韶山沖の山野を跋涉した幼少年時代に身につけたものである。そして見事な詩詞を創作する毛沢東のあの卓抜した

感性は、四季折々に微妙に変化していく山紫水明の地、韶山沖の美しい自然をぬきにしては考えることはできない。あの豊かで柔かな感受性は、まさに天下に名にし負う景勝の地韶山の自然が育んだものとして、毛沢東という人間の中に生き続けている。しかし、韶山沖が毛沢東に残した最も大きなものは、「人間」と人間の「生活」に対する観念であろう。「あるべき人間の姿」「あるべき人間の生活の形」、このような問題に対する基本観念は、毛沢東は韶山沖の幼時の生活体験から形成し、それを生涯固守し続けているように見えるからである。

毛沢東が十六才まで見続けてきた人間の生活とは、一日を汗と土にまみれた労働に過し、それでいて生存線上ぎりぎりという農民の生活であった。自らの血のにじむような労働によって、やっと自らの生存を維持する。これが人間の生活、人間の生存というものであった。自ら労働せず生存することはありません。これはありえない事であったし、もしあるとするならば大きな偽りか、あるいは犯罪であった。毛沢東が韶山沖の人々の生活と自らの体験の中で形成した「人間」と「生活」に対する観念は、強固な信念として毛沢東の中に生涯持続する。われわれがその最初の反響として確認できるのは、一九一九年七月に書かれた「湘江評論創刊宣言」においてである。この「宣言」の中で毛沢東は高らかに断言する。「世界でいちばん大きな問題は何か。飯を食う問題がいちばん大きい」。この言葉の中には当時彼が傾倒していたクロボトキンの「麵麩の略取」の影響を無視することはできない。しかし、この宣言はクロボトキンの思想に触発されつつ、自らの体験を自覚化した所で吐かれた言葉だと理解すべきであろう。クロボトキンの影響はすぐに消え去るが、この信念は持続するからである。毛沢東は自らの食する穀物がどのようにして栽培されるかを知らない知識人に対して、農村に行き労働することを要求し続けた。そしてその労働こそが「誤った」思想を改造する最も有効な教育だという信念を持ち続けたが、この信念の根底にあるのは、まさしくあの韶山沖であろう。毛沢東にとっては、額に汗することなく「生きている」人間は、根源的な所で「間違った」人間存在であり、この「間違っ

た」人間存在こそが、「誤った」思想を生む原因であったのである。

知識人を大いに苦しめた「整風運動」は、知識人にブルジョア思想を捨て、徹頭徹尾「人民に奉仕する」人間に生まれ変わることを要求するものであったが、この運動には農業労働とともに、もう一つの韶山沖を見出すことができず。「道徳的に正しい人間であれ」というあの毛家家訓の叫びである。勿論、整風運動が要求する道徳の内容と家訓のそれとは内容的に異っている。それは時代の思想の相違が然らしめる所であり当然な事である。しかし、道徳の内容は異にしているとは言え、叫びそのものは同一である。毛沢東にとっては、究極的には人間は道徳的に正しい存在でなければならなかったのである。このような人間に対する観念は、毛家とそれを取巻く韶山沖の農民達の道徳意識と人間観が育んだものである。彼等にとっては理想の人間とは、道徳的に「正しく」あらねばならないのである。毛沢東の理想はまさしく、すべての人間を道徳的人間に育てあげることにあつた。このような毛沢東の「あるべき」とする人間の観念の中には、あの家訓と韶山沖の農民達の思考とが生き続けているのを見出すことができるであろう。

二、家庭と資質

毛沢東の祖父毛翼臣は実直な農民であつたが、一生貧困で、ついには先祖伝来の田産を抵当に入れるという苦境に陥っている。この苦境を挽回したのは、毛沢東の父親、毛順生の頑張りと才覚であつた。毛順生は並外れた頑張り屋であつたが、それ以上に商売において、この草深い田舎の人達では及びもつかないような、すぐれた才覚を發揮している。

毛順生は十五才で結婚し、十六才で兵士となり、十七才からは一家の主人として家の経営にあたるようになっていく。彼が父から相続した土地は、六、七畝（一畝は約六・七アール）、僅かなものである。それに借金もあった。この借金を返済するために彼は軍隊に入り、そこで給与を貯めて一年後に返済している。家の経営に当たるようになってからの彼の頑張り、目を見張るものがあつた。朝は日出とともに田畑に出、太陽が山の端に没するまで働きづくめに働いた。しかし、彼は普通の農民のようにただ黙々と働くだけではなかつた。彼は一方では農業労働に励みながら、他方では商売を始め、そこで大いに才能を発揮する。まず彼は節約した米を精白して、詔山に近い小城鎮銀田寺まで担いで行つて売つた。またクズ米で豚を飼ひ、それも売つた。こうして貯めた金で父親が抵当に入れた田産を買いもどす。十五畝の自作農となるのである。年収九十担（二担は約五〇キロ）、家族五人の食糧が三十五担、二十五担の余裕である。彼はこの穀物を貸しつけ利息を稼ぐ。この頃彼は米穀運送も始める。最初は肩で担いでいく小規模な運送業であつたが、妻文氏の実家の援助を得てからは一輪車による輸送へ、更には傭つた船による運送へと大規模化していく。このように商売に精を出すとともに、他方家には労働者を傭ひ、仕事をさせることを始める。最初は季節契約の労働者を傭う程度であつたが、常時一人を傭うようになり、更には冬期にはもう一人を傭うようになっていく。この頃の彼は、耕牛を売る商売にも手を出している。家業は順調に発展しているのである。彼は一九〇三年には従弟毛菊生の七畝の水田を買い、田産を二十二畝へと増やす。毎年の収穫は八十担、四十五担の余裕である。これ以後彼は土地を買うことはせず、資金は土地を抵当にとつた高利貸にまわしている。この方が財産の管理としては楽だからである。こうして彼は二、三千元を持つ詔山沖有数の資産家となるのである。この間に發揮された彼の商才と社交の才にはなかなかのものがある。彼は銀田寺の「長慶和」の株を買い、「祥順和」「彭厚錫堂」などの商店とも常に往来し、自らも「義順堂」の商号を使って「紙票」（一種の小切手）を発行し、また妻文氏の甥にあたる趙氏の経営する

湘郷の大商店「吉春堂」の屋号も使って商売をしている。彼は口癖のように言っていたと言う。「食つても貧乏にならず、使つても窮しない。人に計算がなければ一生貧乏だ。算盤ができれば、誰でもよい生活が送れる。算盤ができない人に、金山銀山をあたえても空しいことだ。」

没落しかかった家を一代で韶山沖有数の資産家の一つにまで築きあげたのであるから、毛順生は疑いもなくこの小世界では、人々に語り伝えられる「成功者」であった。彼の成功の秘密は、「致富」という自ら立てた目標に対して、自分の持てるあらゆる能力を集中する、その集中力にあった。人一倍勤勉に働くことは、もとより当然のことである。最初は農作業に、次いで商売に彼は全力をつくして働いた。そして生活態度は質素儉約を旨とした。また、彼は智慧の限りをつくして新しい商売を着想し、次々と実行していった。親戚や知人の関係も十分に利用して、商売に役立てた。このように彼は自らの立てた目標に対しては、鉄のような固い意思と、つきることのないエネルギーを傾注して突進していった。自らがそうするだけでなく、家族にもそれを要求した。このような努力の成果として彼はその「成功」を獲ちとつたのであった。

だが、このような彼の生活態度は、周囲の人々を幸せにするものでは決してなかった。彼は周囲の人々にも自らと同様に烈しい労働をし、質素儉約な生活をすることを強要した。このような生活の有様を、後年毛沢東は次のように回想している。

父は短気で、よく私と弟をなぐりました。私たちに少しもお金をくれず、とてもみじめな食事しかくれませんでした。毎月十五日には、父は自分の労働者に譲歩して、米と卵をやりましたが、肉は少しもやりませんでした。私には卵も肉もくれませんでした。³

毛順生には家庭の安らぎや潤いという、精神的なものは、殆んど価値を持たなかったように見える。また目に見えぬ

精神的価値にも無関心であった。毛沢東の母文七妹の信心深さとは対照的に、毛順生には信仰心は全くなかった。一度虎に出会い危害を受けなかった。それを神仏の助けだとして、それから彼は仏教に敬意を表すようになっていた。

毛順生は徹底した現実主義者であった。彼の関心は現世的成功に限られていた。「致富」という人生の目標を達成するためには、彼は智慧をしばり、全精力を傾けて努力した。この目標を達成するための手段と手順についての彼の計算は、冷徹であり正確であった。そしてその実行力は粘り強く、エネルギーで、また果敢ですらあった。だが彼の精神は、そこに完結していた。現世の成功とそのための方法、このような世界に彼の精神は完結していて、それ以外の世界には全く無関心であった。冷徹でエネルギーシユな現実主義者ではあったが、その精神は全く卑俗であった。

毛沢東の母親文七妹は、毛順生とは対照的な性格の人物であった。痩せ型で鋭く尖った顔をした毛順生に対して、彼女は丸顔で、ふくよかな容貌をしている。寛い額と清んだ眼、ふっくらとした頬、いかにも慈愛深い感じをただよわせている。彼女は韶山から二十里（一里は〇・五キロ）ほど離れた唐家地という村の農家の出身である。十三才で婚約し、十六才で結婚している。毛順生より三才年長である。彼女は毛家に嫁いできた最初の頃は、毛家を嫌い実家で過ごす事が多かった。最初の子供と次の子供は二人とも幼くして失くしている。三番目が毛沢東である。彼女はこの三人目がまた夭折するのを恐れて、神仏の加護をもとめてあちこちに祈願をくり返す。文七妹の母賀氏は、特に毛沢東を大切に育て、この子が成人するようにとの願いをこめて幼名を「石三」と名づけている。湘郷地方には子供が成人するようにと願って、家畜の名をつける風習があつたが、賀氏は家畜は賤しいと嫌い、この地で人々の信仰を集めていた石観音にちなんで、毛沢東の拝行（兄弟の順序）が三番目であつたので「石三」とつけたものである。文七妹は毛沢東の後に沢民、沢覃という二人の男の子を生み、この二人は無事に成長するが、その後生まれた二人の

女の子はまた亡くなっている。彼女は亡くなった女の子の代わりに養女沢建を育てている。

文七妹は育児と家事以外にも養豚、養鶏、菜園の仕事と家中で最も忙しい人であったが、彼女は見事にそれらの仕事を処理した。性格は温厚聡明、儉約して家事をきりもりしていく事では、この山村で有名であった。このようにして文七妹は勤勉で有能な農家の主婦であったが、しかし、彼女の人間を最も特徴づけるものは、そのような現実的能力ではなかった。文七妹の人間的特質は、何よりもその温い精神にあった。彼女は毛順生とは対照的に、目には規えぬ精神的価値のために自らを捧げて生きるタイプの人間であった。彼女は敬虔な仏教信者であった。時節ごとに天地祖先を祭り、たやす事がなかった。そして信仰が教える通り、人間に対する深い愛情を持って生きた。彼女の貧しい人々に対する同情心は、近隣には有名であった。彼女は飢えた人々に対して食糧を贈った。貧しい同族の毛菊生には、父親は彼からその土地を買ったが、彼女はそれに反対し、度々米や塩漬け肉を送りとどけた。

このように性格も価値観も行動も全く対照的な二人であるから、家族は親しみと愛情にあふれた温いものではなかった。家庭には大きな精神的亀裂が走っていた。このような家庭の様子を後年毛沢東は、ユーモアをこめて次のように回想している。

「家内では二つの『党』がありました。一つは父、すなわち支配者でした。反対党は私自身と、母と、弟と、時には雇用人でした。けれども反対党の『連合戦線』には意見の相違がありました。私の母は間接的攻撃の政策を唱えました。母は支配者に対する感情を露骨に示すことや公然たる反逆の試みをとやかく言いました。かの女はそれは中国人のやり方ではないと説きました。」

このように二つの「党」が対立し合う家庭であったが、それでもそれが毛沢東にとっては、やはり「家庭」であったのは、母親の大きな愛情があるからであった。毛沢東も母親を愛し、母親に深い尊敬と信頼を持ち続けている。毛沢

東が十五才の時母親は重い病気にかかるが、この時、毛沢東は南岳に病氣祈願に行っている。その時の祈願はただ歩いていくというものではなく、数歩歩んでは地面に跪き、また数歩歩いては地面に跪くということをくり返し、南岳までの数百里の道のりを行くというものであったという。毛沢東がこのような行動をとった事を、現在の中国では、信仰心や「唯心主義的傾向」の有無の問題として論じているが、見当外れもはなはだしいと言わねばならないであろう。十五才の少年は最愛の母の生命を救うために、自分の出来る最も困難な事を行ったに過ぎないのである。それ程に母親に対する愛情は強かったのである。

毛沢東は、この母親から大きな影響を受けている。後述するが二人は協力し合い、父親に隠れて、貧しい人や恵まれぬ人を助ける行為を行っている。毛沢東の母親に対する愛情と尊敬がいかに大きかったかは、一九一九年母親が死去した時に、彼が書いた「母を祭る文」や友人に送った手紙の中によく表れている。彼は「母を祭る文」では、母親の人間性を次のように讃えている。

吾母高風、首推博愛、遠邇親疏、一皆覆載、惻惻慈祥、愛力竹致、原本真誠、不作詭言、不存欺心。¹⁰

（大意、我が母は気高き風貌の人で、まず博愛を重じた。遠近親疎を問わず、だれでも受け入れた。やさしい思いやりと慈愛は万人を感動させた。その愛情は誠から出ていて嘘を言わず、他人を欺く心がなかった）

また友人の鄒蘊真への手紙では「世界には三種類の人間がいる。他人に損をさせて自分を利する人、自分を利して他人に損させる人、自分が損して他人を利することのできる人、母は第三の種類の人に属する」と書き送っている。¹¹全く家庭的でない父親の欠落部分を、補って余りある愛情と精神の豊かさが、この母親にはあったのである。毛沢東は人間が幼少年時代に家庭で身につけるべき多くのことを、この母を通して身につけた。毛沢東にとっては、母こそが家庭であった。

毛沢東は父に対して烈しく反撥し、父とは対立しながら成長しているが、しかし、彼の中には疑いもなく濃い父の血が流れている。父と母、この全く相異なる要因が、彼の中で見事に調和し、それが毛沢東という人間の独特な人間的資質を形成しているかに見える。あの複雑で類い稀な、毛沢東という人間の独特な個性は、そのようなものとして考えることができる。伝えられている毛沢東の幼時のいくつかのエピソードから浮かび上がってくるのは、周囲の圧力や抑圧に抗して、あくまでも自己を貫徹していこうとする、強烈な個性的人間の姿である。内から沸き上がってくる強烈な人間としての自己主張、そしてこの自己への徹底した固執、このような意味での強い個性を持つことは、何事かを為しとげるための、不可欠の人間的資質であるが、幼時の毛沢東には既にこのような人間的資質を見出すことができる。周囲に屈することを潔しとせぬ自己主張は、反抗の物語となる。毛沢東はスノーに二つの反抗の物語を語っている。一つは十才の時私塾から逃げだし、県城を目ざして三日間山の中を歩きまわったという話、もう一つは父から大勢の客の前で、怠け者で役たらずと罵られたのに憤慨して、家を飛び出し、追ってきた父に、池に飛びこむと脅して、和睦をかちとった話である。¹²

前者の話がどのような事情の下に起ったのか、現在ではいくつかの説明がある。その一つは次のように言う。先生が不在の間に塾の友達を誘って毛沢東は水泳をする。歸ってきた先生はその事を知り、主謀者と目した毛沢東を叱る。すると毛沢東は「論語」を引用して、孔子は水泳を許している、と反論したので、先生は父親に「この子は自分よりも才能も学問もあり、手に余る」と言いつける。棍棒を持って駆けつけた父親は、現由も聞かずに、毛沢東を殴りつける。そこで毛沢東は山へ逃げこんだというのである。¹³ また別の一書は、丸暗記の授業に耐えきれなくなった毛沢東が、授業中に小説を読んでいて、先生に耳をつかんで起立させられる。この先生のやり方に憤慨して教室をとび出して山へ逃げこんだという。¹⁴ また別の説明は先生から殴られたからだと言い、¹⁵ 自分が殴られたのではなく、他の生

徒が殴られるのを見て憤慨し、逃走の形で反抗の気持を表明したのだとも言う。現在となつては真相は解からないと言つた方がよいであろう。だが毛沢東の学友であり、伝記作者でもある蕭三が言うように、当時の私塾では「板（先生はこれで生徒を殴つた）の下で立派な人間が育つ」という信念の下に、様々な体罰が実行されたのである。¹⁷幼い毛沢東はこのような、抑圧的な私塾の教育思想と方法に反抗し、懸命に自己を守つたのである。後者の話については、現在でも、毛沢東の語つた以上のことは、あまり言われていない。ここで重要なのは、このような経験から引きだした毛沢東の教訓である。毛沢東は次のように語っている。

これから私は自分の権利を公然たる反抗でもつて擁護すれば、父はやさしくなり、私がおとなしくひかえ目のまままできるとかれは罵るばかりで、いつそう私をなぐることをさとりました。¹⁸

この闘争の哲学は毛沢東を貫く生涯の信条となつた、と言つてもよいであろう。この二つの話に続く反抗は、親が決めた結婚を拒否した事である。毛沢東が十四才の時に父親は、四才年長の十八才の羅氏との婚姻を習慣通りとりきめる。¹⁹しかし、毛沢東は断固としてこの結婚を拒否する。当時の農村社会では、毛沢東のこの行動は「不孝」であり、社会の慣行に反逆することであつた。毛沢東は社会の慣行など物ともせず自己の決意を押し通したのであつた。

このように、「反逆」の物語は、並外れた毛沢東の強い個性を語っている。彼には私塾の教師や父親、そして社会の慣行にも屈することのない、強烈な自己の主張があつた。それは信念や思想と言うよりも、心の底から湧き上つてくる生命の叫びとでも言うべき性質のものであつた。それは何物にも屈することを潔しとせず、あくまでも自己を貫徹しようとする。毛沢東という人間には、常人の遠く及ばぬ桁外れに強烈な、この「生命の叫び」があつた。偉業を成しとげる人間の、絶対に具備しておくべき人間の資質を、彼は生まれながらにして持つていた、と言つてもよいであろう。だが皮肉なことに、この人間的資質は、対立し合つた当の相手である、父からの遺伝であるように見える。

父は頑固で強情、あらゆる困難や障害を克服し、家族等の反対は圧さえつけて、物凄いエネルギーをもって、ひたすら自分の目標を追い続けた。この頑固と強情とエネルギー、そして自分自身への忠実さこそは、毛沢東が父から受けついでものであった。この時代には未だ表面には出ていないが、父親の着想力、目標と達成方法との間の冷徹な計算とリアリズム、そのような能力も、毛沢東は受けており、その能力は時の経過とともに次第に表面に姿を現わしてくる。そしてこれらの能力は、危機に陥った毛沢東を度々救うことになるのである。

毛沢東の人間を伝える幼時のエピソードに、反逆の物語と全く性質を異にする、もう一つの種類のものがある。毛沢東のやさしい心情、思いやりの心を伝えるものである。例えば次のような話である。私塾の同級生で、弁当を持ってこれない貧しい家の子がいた。毛沢東は最初は一緒に食事をして、自分の弁当を半分食べさせていたが、母親にその事情が知れたので、母親は、二つの弁当を持たせるようにした。¹⁰このように母と協力して貧乏人を救う話には、次のようなものもある。母親は、私塾に払う口糧（授業料に相当する）として、毛沢東に二籠の白米を担いで行かせるが、毛沢東はその途中で、毛承七夫婦の喧嘩に出くわす。原因は家に食べるものがなくなり、毛承七の妻が、隣村へ物乞いに出かけた事である。自分の面子がつぶされたとして、毛承七が怒ったのである。事情が解った毛沢東は、毛承七の家の米櫃に、自分の担いで来た米を空けて家へ歸る。あまりに歸りが早いのを不審に思った母親は、毛沢東に問いただが、事情が解ると、毛沢東の行為に賛成し、父に隠れてひそかにまた米を担いで行かせるのである。¹¹このように貧乏人を助ける行動は、次第に父親との対立の様相を濃くしていく。ある時父は、毛沢東に売った豚の代金を取りに行くように命じる。毛沢東は出かけて代金を受取るが、その歸りにボロをまとった数人の貧しい人に出会う。彼は受け取った豚の代金を、すべてこれらの人に与えてしまうのである。またある老婆が育てた豚を毛順生に売ることにして、手付金を受け取る。所がそれから数日もしない間に、豚の値段が上る。毛沢東が父の命令で豚を受取

りに行った時には、老婆は大いに後悔している所であった。嘆く老婆の姿を見た毛沢東は、豚を受取らず、彼女が返す手付金だけを受取って歸つて来る。そして父親から大いに罵られるのである。秋の収穫時に、自分の家ではなく、隣家の取入を手伝った話もある。収穫した穀物を、太陽に干して乾燥させていた時に、急に大雨が降ってくる。雨で穀物が溝に流されるので、父は大忙しで収納しようとするが、この忙しい時に毛沢東はいない。自分の家ではなく、隣家毛四おばさんの家を手伝っていたのである。その事を知って殴りつけようとする父に、毛沢東は言ったという。「四阿婆ババさんの家は貧しい。地代も払わねばならぬ。一年中腹一杯は食えぬ。穀物の損失は（少しでも）大した事だ。我が家は自分の田で、穀物はみな自分のものだ。少し流されても大した事ではない。」²³

このような毛沢東のやさしい行為を伝えるエピソードは、他にもまだある。毛沢東の人間の原質に、信仰深く、広い慈愛の心を持った、母親から受けついで、強い人間への愛情があることは疑えない。人一倍強いヒューマニズム、あるいは孟子の言う「惻隱の心」が、毛沢東には存在している。晩年になってもこの気持には、変りはなく、護衛や看護婦など身辺の人には大変にやさしく、思いやりがあったことが伝えられている。²⁴ 反逆を貫く強い自我の反面には、傷つき易く、感じ易い、実に柔かな、やさしい心が同居していたのである。革命家毛沢東を生み出す根源となつたのは、強い精神であるよりは、むしろ感じ易い、柔かい精神であったかもしれない。社会的事件を見聞きし、社会的視野が開けてくるとともに、毛沢東の貧しく恵まれない人間に対する愛情は、謀反への共感、社会正義の追求、更にはそのための行動へと成長していつている。

毛沢東が社会へと視野を拡げる契機になったものに、自らが語る所によれば、三つの事件がある。一つは長沙の米騒動であり、もう一つは韶山における秘密結社、哥老会の謀反であり、最後の一つは父親も被害にあった、「喫大戸」（地主の家の食料をただで食う）の運動である。長沙の米騒動とは、一九〇九年毛沢東が十六才の時に起つたもので

ある。飢饉に乗じて米価をつり上げる米穀商と、それに対して有効な対策を講じない役所に対して、民衆が起した抗議の行動で、民家は衛門（旧時の役所）を焼き払い、銀行や税関等をうちこわす。その結果、首謀者と目された人物は逮捕され、首を切られ、見せしめのために柱にされることになる。²⁵この事件に対して毛沢東は、「私の全生活に影響を与えた」と言い、「私は謀反者と一緒に私自身の家族のようなふうの人々がいたことを感じ、かれらに与えた処分の不正を非常にいきどおりしました」と語っている。²⁶食料を要求するという人間としての当然の行動を、軍隊を使つて弾圧し、指導者を処刑にするという、権力のあまりに非人間的行動に、少年毛沢東の正義感は大いに刺戟され、権力の不条理に憤つたのであろう。第二の哥老会の謀反とは、毛沢東の語る所によれば、石臼をつくる龐という男が首領となり、瀏山という山に砦づくり、地主と政府に対抗したが、軍隊に敗れて最後には首を切られた、という事件である。がこの事件は一八六六年に湘潭の別な場所で起つた事件であることが、明かになっている。²⁷毛沢東の生れる前に起つた事件である。しかし、毛沢東は、土地の人々の間に語り伝えられてきた話を聞いて、大きな印象を受けたのであろう。彼はこの事件から受けた影響を、「けれども学生たちはみな謀反人に同情したので、かれらの目には龐は英雄でした」と語っている。²⁸「喫大戸」の運動では、都会へ米を輸送する毛順生の荷物も農民から押さえられ、毛順生は激怒するが、毛沢東は冷静に、「私はかれに同情しませんでした。同時に私は村民のやり方も悪いと思いません」と語っている。²⁹

貧しい大衆の生きていくための社会を知ることについて、少年毛沢東の気持は、単なる貧しい人への同情から、彼等の抗議の行動に対する共感へと、次第に変つてきている。彼の同情心は、社会正義の追求という形をとり始めてる。次のエピソードは、少年毛沢東が自ら正義と信ずる事に対して、身をもって実行に起ち上つたものである。一九一〇年の初に韶山で、「喫大戸」の運動が起る。先頭に立つたのは毛承文という、血気盛んな男である。彼は飢えた農民

を率いて地主の倉庫を襲い、穀物を出させ、飯を炊いて食った。毛氏の族長毛鴻賓が一族の穀物を秘かに米商人に売却しようとしている事を知ると、毛承文は数人の仲間とともに、毛鴻賓を襲い、倉庫を開いて安値で穀物売り出すことを要求する。しかし、彼は逆に毛鴻賓から捕へられ、がんじがらめに縛られて、毛氏の祠堂に押しこめられる。毛承文は「反逆者」「族規破壊」の罪名を着せられて、潭江に投げこまれることになったのである。この事を知ると毛沢東は大いに憤慨し、貧しい農民達と毛氏祠堂へ駆けつけ、毛鴻賓に言ったという。「私にはすべてが解った。族規に違反したのは、安く米を売ることがを要求した毛承文ではなく、ひそかに一族の穀物を売ろうとしたお前だ」と。こうして一族の者の賛同をかちとって、毛沢東は、毛承文を無事に釈放したというのである。³¹このエピソードは十六才の少年の行動としては、いささか出来過ぎの感はある。このエピソードを書いた筆者も、そのようなためらいを見せている。しかし大衆の怒りの先頭に立てば、十六才の少年でも筋の通った事を言いさえすれば、大きな働きをすることは可能である。後年の毛沢東からすれば、この時代にこの程度の行動力を持っていたとしても不思議ではない。この時代になると、毛沢東は母親にはない強さと逞しさを身につけてきたのであろう。人々への愛情は、同時に社会的不正や横暴に対する抗議という形をとり、より大きな、広い世界を目指すようになり始めているのである。

51

毛沢東の「志」や生涯をかけた「人生の目標」は、このような彼の精神の志向のなかから形成されていったと考えられる。しかし、ただ単に精神に存在する「志向」が、自らの人生をかけた「志」や「目標」となるためには、そこに長く厳しい、知的探求が存在しなければならぬ。毛沢東の生涯とは、この知的探求によって不断に自らの「志」と「目標」を再構築する過程であった。生涯革命家であり続けた毛沢東は、また生涯身辺から書物を手離すことのない読書家でもあった。彼の革命家としての生命は、まさに知的探求そのものの中にあつた。われわれは次には、彼の知的探求の原点にたち返らねばならないであろう。この中で彼の精神の志向は、次第に「志」として明確な形をとる

三、私塾生活と「志」の形成

毛沢東は八才になるまで母の実家で育てられている。この家は四世同堂の大家族であり、八番目の叔父文王欽は私塾を開いており、毛沢東はその授業を傍聴していたと言うから、彼は幼時から学問の雰囲気の中で育ったのである。八才になると父親は実家に引きとり、家から百米ほどの所にある南岸私塾に入れる。この私塾は鄒家の宗廟に設けられたもので、宗族や家族が負担する公糧（一族の農業税）によって運営されていた。生徒は維持費を納めねばならず、毛順生も二担（一担は約50キロ）の穀物を納めている。教師は鄒春培という五〇過ぎの人物で、毛沢東が「私の先生は頑固派にぞくしていました。かれはきびしく苛酷で、生徒をよくなぐりました」と語った、その人物である。私塾には神棚があり、「大成至聖文宣王先師孔子之位」と書いた赤い紙が貼ってあり、塾生は毎日それに最敬礼する事が義務づけられていた。当時の私塾の雰囲気は大体このようなものであった。

毛沢東は南岸私塾で、一九〇二年から一九〇四年秋までの約二年間勉強している。学んだのは「三字経」に始まり、「論語」「孟子」「詩経」である。学ぶと言っても、当時の学習方法は暗誦である。内容は理解せずとも、経書の本文を暗記したのである。鄒春培先生は厳格な先生であったので、厳しい体罰とともに教育したようであるが、毛沢東はすぐにこの先生の教育の枠の中に入りきれなくなっている。あの山中への逃亡事件を引起したのは、この私塾時代である。また彼の抜群の記憶力も、先生を手こずらせたようである。弟沢民の妻王淑南は、この時代毛沢東が「省先

生」のニック・ネームで呼ばれていたことを伝えている。先生から句読点をつけてもらわなくても文章が読めたし、先生の手本がなくても、手本通りに書いた子よりも立派な字を書いたからである。鄒春培先生はただ暗誦させるだけの教育では、このすぐれた才能を持った少年を、満足させることができないことを自覚したようである。彼はある日毛順生に言った。「順生さん。あなたの家の潤之は、文曲星が降誕したものでないかと思えます。私の池は小さく、魚は大きい。もう私の手に余る」。また逢う人ごとに、彼は嬉しそうに言った。「潤之は将来大器になれる。年は若い、学問はもう自分の及ぶ所ではない」。ほどなく鄒春培は私塾の先生を辞め、湘郷へ出て他の仕事についたということである。

一九〇四年秋、毛沢東は韶山の関公橋私塾へ移る。塾師は毛咏生である。一九〇五年夏から一九〇六年夏までは、韶山の橋頭湾で鍾家湾私塾で学んでいる。塾師は周少希。この二つの私塾での学習の詳細や塾を変った動機については解っていないが、この時代の学友だった賀福祥は、この時代の毛沢東について、非常に真剣に勉強し、本を見なくても書ける程に記憶力にすぐれており、学習態度も落着いたものだった。同級生は塾が終ると先を争って歸ったが、毛沢東はゆっくりと歩き、文質彬彬として大人の風格があった、と回想している。毛沢東が書法の基礎を身につけたのもこの時代である。最初は欧陽洵の書体を学び、次には錢南国の書体を学び、後には各家の書法が自由に書けるようになった、と言われている。

一九〇六年秋、十二才の毛沢東は韶山の井湾里私塾へ移る。ここでは一年足らず、翌一九〇七年の夏まで勉強する。塾師は同族の兄に当たる毛宇居、当時四一才である。塾の学生は九人。毛宇居という人物は、後に一九一五年には蔡鏞の討袁軍に参加し、一九二六年には中国共産党に参加している。後の彼のこの行動が示しているように、彼は当時から革新的な考えの持主であった。彼は当時の私塾が、文字を教えることだけに終ることに疑問を持って、自ら塾を

開いたのである。韶山では「純儒」（学問のある人）として尊敬されていた。経書に興味をしめさない毛沢東のために、「左伝」を教材として選んだのは、彼の見識であった。「左伝」は毛沢東の歴史への興味を開くきっかけとなった。毛沢東選集の中でも「左伝」の引用は最も多い部類に入り、三〇ヶ所にもものぼっている。¹⁰⁾

井湾里私塾時代の毛沢東については、塾師の毛宇居自身の回想がある。彼はこの時代の毛沢東について、次のように語っている。毛沢東がここで読んだのは、「公羊春秋」「左伝」等の経書、史書であった。彼が最も喜んで読んだのは、「精忠伝」「水滸」「隋唐嘉話」「三国志」と「西遊記」等の中国古典小説であった。当時の私塾の規則では、小説は雑書であって、学生に読むことは許されてなかった。だから彼はいつも隠れて読んでいた。私が来るのに気づくと、正書をその上に置いた。私が見つけて、わざと沢山の本を暗誦させると彼はみな暗誦できた。¹¹⁾ また同級生郭梓材は、次のように語っている。沢東同志は小さい時から異常に聡明で、記憶力が特に勝れていて、一回目を通せば忘れなかった。彼は「三字経」を読むのを好まず、「四書」も読まなかった。彼に本を暗誦させる先生にはよく逆った。彼は各種の小説を好んで読んだ。この頃彼はわずか十数才の子供であったが、われわれの心の中では、公認の指導者であった。彼は我々の先生への造反を指導し、暗誦に反対しただけでなく、遊びでも彼はわれわれを組織し、戦列に整列させ、指揮をとり号令を発して突撃させた。¹²⁾

この私塾で作ったとされる毛沢東の最初の詩が残されている。この詩が制作された事情は次のようなものである。先生の留守中、復習することを命じられていたにもかかわらず、毛沢東は裏山へ脱け出し栗拾いをする。命令に背いた毛沢東に、罰として暗誦を命じてもよくできるので、先生は庭の井戸を讀める詩を作るように命じる。そこで毛沢東が作ったのが次のような詩である。

天井四方、周圍是高牆、清清見卵石、小魚圍中央、只喝井里水、永遠養不長

(大意、井戸は真四角、周囲は高い壁。水は澄んでいて、卵石が見える。小魚は中央に集っているが、ただ井戸の水を飲むだけでは、いつまでも成長しない。)後年の詞のように深い内容を持ったものではないが、毛沢東の人間の一面を表現した詩である。劉濟昆は「大風大浪中で鍛練する」という毛沢東の思想の雛形がある。¹⁴と評価しているが、確かにそういう面はある。小さな世界に拘束されたり、そこに安住したりすることを嫌う、毛沢東の原感情とでも言うべきものが表現されている。

一九〇七年夏、十三才の毛沢東は五年余りの私塾での学習生活に終止符をうつ。人々の回想が伝へるこの時代の毛沢東からは、既に卓抜な才能と重厚な態度を持った少年の姿が浮かび上ってくる。特に記憶力は並外れて秀でていて、彼の卓越した才能は学友達のみならず、教師すら畏怖させるものがあり、彼は特別の学生として扱われている。韶山ではこの時代から、彼は端倪すべからざる人物であった。しかし、決して模範的優等生ではなかった。むしろ、その強烈な個性と旺盛な知識欲は、塾教育の枠組に入りきれず、度々問題を引起している。天衣無縫、自由奔放な毛沢東の人間性の片鱗をうかがわせるものが、この時代から現れている。五年余にもわたる私塾での勉強を、毛沢東がなぜ突然やめたのか、父親の命令だとする見解が有力である。確かに自分の仕事を助ける帳簿整理の能力を身につけさせるためと、自分が学問がないために訴訟事件で敗れたという、苦い体験から子供に学問をさせた、父親の目的からすれば、五年間の学習はもう充分なものであろう。しかし、父親の命令に無条件で、一方的に服従する毛沢東では、決してない。彼自身の内部にも、塾教育に満足できない気持が大きく膨れあがっていたのである。毛沢東は自分が経書をきらい、老中国の伝奇小説、とくに謀反の故事、岳飛伝(精忠伝)水滸伝、隋唐演義、三国志、西遊記を好んで読んだと語っている。老先生の眼を盗んで読んだこれらの本から、大きな影響を受けたことを、毛沢東は次のように続けている。

私たちは多くの話をほとんどそらでおぼえ、何度も何度も論じあいました。私たちはこういう本を好み、私たちといつも話をかわした村の老人たちよりも、それをよく知っていました。私は感じやすい年ごろ読んだこういう本によって多くの影響を受けたと信じています。⁷⁷

毛沢東の人間としての知的欲求に、経学を中心とした私塾の教育は応えるものではなかった。彼の敏感な感受性と旺盛な知的好奇心は、そのような空虚な観念と教理ではなく、もっと生々とした、生きて活動する人間に向っていた。中国古典小説の世界では、傑出した腕力や智力を持つ英雄好漢達が、ある者は天下を掌中に収めるため、ある者は権力の不当な仕打ちに対して復讐をはたすため、死力をつくして生きている。例えば曹操は劉備に向って言う。「英雄と申すのは、胸に大志を抱き、腹中に大謀を秘め、宇宙をも包む豪氣と、天地を吞吐する志を抱く者のことじゃ……：：：当今、天下の英雄と申せるのは、それ、貴公と、このわしじゃよ」⁷⁸。また梁山泊に天下の英雄豪傑を結集し、悪代官に対して徹底抗戦している宋公は言う。「朝廷の不明なるにより、よこしまな家来どもも政治をとりしきり、おべつか使いどもも権力をほしいままにし、欲ばり役人を任命し、天下の民草を苦しめるにまかせました。宋江ら、天に替って道を行なうもの、いささかもあだし心はいただきませぬ」⁷⁹。

少年毛沢東は天下を呑む豪氣に生きる英雄や、世の不正に身を賭して戦う正義の好漢達に、あるいはともに憤慨し、共感し、喝采し、彼等とともに生きたのである。そして自らもこのような英雄好漢になることを、固く心に誓ったのである。自ら「私は感じやすい年ごろに読んだこういう本によって多くの影響を受けたと信じています」と言っているように、彼は超人的な能力を持つ豪傑や烈しい正義感に生きる好漢に、少年らしい憧れを投影し、そこに理想の人間像を見たのである。これら躍動する人間に感じる心の底から湧き上ってくるような興奮と感動は、経書では絶対に経験することのできぬものである。多感な少年毛沢東が、私塾の勉強に魅力を感じなくなった理由は、このような所

にあるであろう。彼は経書にはない生きた人間の世界と、生きた人間世界の「知」とを欲したのである。そして彼の中国古典小説の世界への傾倒は、毛沢東の人生の基調を決める大きな影響を彼の精神に残している事を、われわれは見逃してはならないであろう。即ち人生の目標としての「英雄」と「英雄史観」である。

中国古典小説の世界は、竹内実が「それは一治一乱をくりかえすが、平和と戦争も、すぐれた英雄豪傑の知謀と武力によって操縦される。世界が一つの舞台であって、そこで演じられるドラマは、非凡な個人の深謀遠慮によって筋書きが書かれるのであり、天意も彼らをとおして実現されるのだ」と言うような、一種の「英雄史観」によって構成されている。そこでは英雄豪傑のみが歴史を動かす、彼等の行動によって作られたのが「歴史」である。これらの小説によって、少年毛沢東の心に最も深く刻みこまれたのは、これら「英雄」への憧れであり、自らをこれら「英雄」へと形成する意志であった。英雄志向と英雄史観は、毛沢東の生涯持続する精神の基調音の一つである。彼は後に湖南第一師範時代に宋学の薰陶を受ける。儒教にあるのも「英雄豪傑」の代りに「聖人」がくる一種の「英雄史観」であり、毛沢東の「英雄史観」は、より洗練されたものになるが、やはり持続するのである。

私塾をやめた毛沢東は、猛烈な勢いで自習を始める。田畑の仕事を手早くすませ、時間を作っては木陰で読書し、夜は父に隠れて灯火がもれぬように注意しながら、深夜まで本を読んだ。韶山で借りられる本は、あらゆる本を読み、和尚のお経までも読んだ、と沢民の妻主淑瀾は回想している。²¹このような自学自習の読書生活の中で、毛沢東が大きな衝撃を受けた二冊の本があった。「盛世危言」と「校邠廬抗議」である。彼は「盛世危言」は私の勉強をふたたびはじめの欲望を刺戟しました、と回想しているが「盛世危言」から受けた影響が何であったかは、語っていない。毛沢東の勉強の意欲を刺戟したものは、彼が全く知らなかった、新しい世界と事物についての知識であったと思われる。西欧近代の目を見張るような技術的達成と、驚くべき社会の大変革、毛沢東の心を魅了したのは、そのような事

への知識であったであろう。これが毛沢東が生涯にわたって戦い続ける相手となる「近代西欧」との、最初の出会いである。韶山沖の生活だけしか経験した事のない十三、四才の少年に、西洋文明を批判的に検討する能力があったとは思われない。少年毛沢東は、西欧近代文明にただ驚異の目を見張り、烈しく知識欲を刺戟されたのである。

「盛世危言」は洋務派の思想家鄭観応の警世の書である。鄭観応は季鴻章のブレイン、企業経営の実務家、そして買弁の経験もある、当時の中国では、西欧に関する知識では群を抜いた存在であった。彼は学校、科学、議会、選挙、新聞、商業、工業、鉄道、鉱山開発、郵便制度、国防等と近代西欧が達成した成果の内容を詳細に紹介する。そしてそれらがいかにすぐれた威力や利便を持ち、人間の生活と社会制度にいかなる変革をもたらすかを説いていく。そして中国も近代西欧の諸成果に倣い、それらを取り入れ、自己改革をとげる必要があることを主張するのである。中国改革の立場は、最初の「道器」論により、「器」としての西欧文明の吸収を主張していたが、最後には「議會」——民主々義にこそ西欧文明の本質があるという「変法派」に近い主張となっている。毛沢東が感激したもう一冊の本「校邠廬抗議」は、「中国の倫常名教をもつて根本とし、それを諸外国の富強の術によって補強すれば、いっそう善の善なるものではないだろうか」と説く、純粹に洋務派の立場からの立論であるが、西欧の持つすぐれた軍事技術や工業技術を摂取することで、中国の富強の達成を説く愛国の書である。毛沢東は両書の間にある微妙な相違などあまり理解できなかったに違いない。毛沢東の心の烈しくうったのは、西欧近代科学の持つ驚くべき威力であり、それを前にした中国の富強の必要であったであろう。西欧近代文明の摂取、中国の改革＝富強の達成、この二つのテーマが毛沢東少年の心を大きく占めることになったのである。季漱清という人物への共感も、このような毛沢東の関心の延長上にある。季漱清は一八四七年の生れで、毛沢東よりおよそ二十才の年長である。湘潭師範と地方自治法政専門学校卒業生で湘潭県の七都都校と韶山の季氏族校（私塾）で、長年教鞭をとっていた人物である。彼は変法派の影響を強

く受け、学校を興し科学知識を普及させることを主張し、中国社会を強く支配している宗教と迷信に反対したので、村では「過激派」と目されていた。趙世超は毛沢東は季漱清と一九〇六年頃から知合ったとしている。毛沢東は彼の学識を尊敬し、彼の話を聞き、彼のすすめる本を読み、季漱清も毛沢東の才能を見込んで、作文の添削をするなど教育に情熱を注いだので、一人の間には普通の師弟よりも密接な関係が形成されていた、と言っている。²⁴ 毛沢東も「私は彼を讚美し、その意見に同意しました」と語っている。²⁵

毛沢東は再び勉強を再開する。一九〇九年秋、約三年間の空白の後に、私塾での学習を再開するのである。私塾での学習再開については、毛沢東自身父親と喧嘩をして家出をし、「私は失業中の法律学生の家へ行き、そこで半年のあいだ勉強をしました。その後私は年寄りの学者のもとで経書をもっと学び、また多くの時論と数冊の本を読みました」と語っている。²⁶ しかし、現在の研究によると、この法律学生は毛岱鐘という人物で、一八九〇年の生れで、毛沢東より僅か三才年長であるだけで、とても毛沢東の教師をつとめたとは考えられない。毛沢東の先生であったのは、彼の父親毛簡臣であった、とされている。²⁷ 毛簡臣は左宗棠の軍隊に参加し、国境守備兵として勤務したという経験の持主であり、性格は剛直、厳格という評判であった。毛沢東はここで「史記」を読んでいる。しかし、ここで勉強したのは、僅か二カ月である。同年冬には同族の伯父、同族で唯一の秀才である毛麓鐘の下へ移っている。毛麓鐘は一八六六年の生れ、当時四十四才である。彼は若い時には軍務についていたが、日清戦争の敗北後、清軍の腐敗に憤慨して辞職し、故郷に歸り閉門隠居して「韶山小隱人」を自称していた。変法思想の影響を受け、西洋の先進技術を吸収し、富国強兵を図らねばならぬとする考えの持主であり、彼は中国と西洋の学問をともに教えることを目的に、新式の私塾を開いたのである。毛沢東は、ここで「史記」「綱鑑類纂」（明の王世貞という人物が朱喜の「通鑑綱目」に依拠した書いた一種の通俗歴史教科書）「日知録」（清の顧炎武の著書）と、若干の詩詞を学んでいる。（季銳は

「日知録」は田舎の私塾で教科書に使えるような手軽な内容のものではない。従って毛沢東がこの時代に「日知録」を読んだということは疑問だとしている。「毛沢東早年讀書生活」四六頁）毛麓鐘は毛沢東に祖国の山河を愛し、胸襟を大きく開き、万巻の書を読み、諸国を旅せよと教えた。³⁸この毛麓鐘の教えは、毛沢東には大きな刺戟であった。毛麓鐘の私塾は新式の教育を目指したものであったが、それはやはり基本的には旧式の私塾であった。毛沢東は満足することができなかったであろう。数ヶ月勉強しただけで、一九一〇年になると、この塾もやめている。この頃毛沢東はその後の人生に非常に大きな影響を及ぼす一冊のパンフレットに出会っている。「中国が列強に分割される危険を論ず」というパンフレットで、趙志超は季漱清が毛沢東に紹介したものであろう、と推測している。³⁹このパンフレットは「ああ、中国はまさに亡びんとしている」という一句で始り、朝鮮、台湾、インドシナ、ビルマなどの諸国が宗主権を喪失したことを論じたものであった。このパンフレットを読んで、前述した長沙の米騒動での指導者の処分の不正を憤り、哥老会の謀反人に同情し、「過激派」季漱清の主張を讚美していた毛沢東の「反逆的な若い精神」は、強い印象を受け、自分の人生の目標についても、かなり明確なイメージを持つようになったと思われる。毛沢東の「これを読んだあとで私は祖国の将来を思って暗澹となり、国を救うのを助けるのは全人民の義務であることを理解しはじめました」という言葉は、毛沢東が「救国」を、自分の人生の大きな課題として、意識し始めたことをしめすものだと理解することができる。事実、これから湖南第一師範に入学するまでの数年間の毛沢東の行動は、「救国」中国の改革、そのための新思想、新知識の吸収という事を軸に回転している。彼は猛烈な勢いで勉学に取り組んでいるが、彼が情熱を注いだ対象は、康有為であり梁啓超であり、少し後れて孫文等「革命派」であり、そしてアダム・スミスやルソー等の西欧の思想家であった。

毛沢東が自ら意図する人生の方向に歩み出せるか否か。この人生の大きな岐路は、東山高等小学校への入学問題に

あった。「盛世危言」に触発された毛沢東の燃えるような知識欲は、従兄弟文運昌から、潭郷に西洋の「西学」を教える「新式」の学校があると聞くと、抑えることができず、彼はその学校への入学を決意する。しかし、父親は全く別な事を考えていた。自分の商売の手助けをさせるため、湘潭の米屋に従弟奉公させようと決めていたのである。この時、毛沢東の決意を支持し、父親に翻意させたのは、母親を初めとして塾師毛麓鐘、母方の叔父文玉欽、従兄弟王季範、季漱清等の人々であったという。彼等は毛沢東が並外れた才能の持主であることを説き、父親を説得したのである。父親は毛沢東の五ヶ月分の寄宿料その他で千四百銅元を支払うことを承知する。この父親の翻意は、毛沢東の人生にとって決定的な意味を持っていた。もし父親が頑固に自分の意志を変えず、毛沢東に勉学の機会が与えられなかったとするならば、毛沢東の人生は大きく変わったものとなっていたであろう。父親の持っていた一定の融通性と開明性は、やはり毛沢東の人生にプラスのものとして作用しているのである。ここで毛順生の名誉のためにつけ加えておけば、彼は毛沢東の自伝から受ける吝嗇一辺倒というイメージとは、やや違った人間であったという事である。近年発見された碑文によると、韶山沖の「龍麓橋」という橋の修理のために、毛順生は洋銀四元を寄附している。七人の寄附者中二番目の金額である。この事は毛順生という人物は、自分の収入に応じて村への貢献も心得ていたことをしめすものであろう。

61

湘郷の東山高等小学校入学のために旅立つ十六才の毛沢東は、家を出る前に一首の詩を残している。恐らくこの頃愛読していた「新民叢報」で知ったものであろう。明治維新の志士、西郷隆盛の詩と、殆んど同一のものである。「孩児志を立てて郷関を出ず。学びて名を成さずんば、誓つて還らず。骨を埋めるに、何ぞ須いん桑梓の地。人生処として青山ならざるはなし」。西郷の原詩から二ヶ所変えられている。「男児立志」と「死不還」の部分であるが、意味は全く変わっていない。明治維新の大業を成功させた西郷の「志」に、毛沢東は生まれて始めて郷里を出る自らの

「志」を仮托したのである。この毛沢東の「志」が決して小さなものではなく、「救国」の大業を意識したものであったことを、忘れてはならないであろう。この頃毛沢東の生涯のテーマは、かなりはつきりしたものとして形をなしていた。

韶山沖の十六年間に於ける生活、特に私塾での六年余にわたる生活で、毛沢東は旧時代の知識人が身につけるべき学問の基礎的教養は、体得することができた。その後、毛沢東が一人の知識人として生きていくことができたのは、この学問の基礎があったからである。その意味で、私塾の生活は毛沢東にとって、極めて大きな意義を持つものがあった。毛沢東の学問の「原点」もまたそこにあった。しかし、韶山沖を出る十六才の毛沢東は、これまでの自己の生活を否定し、全く新しい思想と知識を求めて旅立とうとしていたのである。

四・世界への旅

湘郷県立東山高等小学校は、青煉瓦青瓦の大きな建物、黒漆の大門、周囲に高い堀をめぐらし、中には広い運動場を持った公立の正規の学校であった。清朝は一九〇一年と翌二年に教育改革を宣言し、一九〇六年には、新しい小学校と近代的な高等教育機関を、設置する計画を立案している。この計画はほんの一部しか実行されなかったが、いくつかの新式の学校は設立された。これらの大半は、主として商業界の子弟の教育に対する要望に應えるためのものであったので、名目上は公立であったが、大半は民間の商人ギルド、海外の華僑、地主などの寄附によって運営されていた。このような性質の学校は湖南、湖北、東部沿岸地帯の省など、商人階級と海外から歸国した知識人の影響が強い所に多かった。特に湖南省の省都長沙は、そのような教育の中心地であった。東山小学校もこのようにして設立

された新式の学校の一つであった。当然のこととしても地域の学校としてのセクシヨナリズムは強かった。

毛沢東が入学にあたって最初にぶつかつたのが、この地域の壁であった。湘郷人でない毛沢東の入学を許可すること、に、反対が多かつたのである。この窮地を救つたのは、譚咏春という国文の教員であつた。彼は「言志」という入試問題に対して、毛沢東が書いた文章を読み、この才能を「建国の大用」と称賛し、この意見に校長季元甫も「我々の学校は建国の人材を取つたものだ」と言つて同意し、毛沢東の入学は許可されたのである。

この学校は経書を重視せず、中国と外国の文学、歴史、地理、自然科学などを教えた。しかし、毛沢東がこの学校で注目されたのは、新式の学問のためではなく、私塾時代に培つた古文の文章力においてであつた。現在その文章を見ることはできないが、毛沢東はこの学校で「救国図存論」「宋襄公論」という作文を書いている。譚咏春は一〇五点を与え、「君の身には仙骨があるようだ。寔おぼいなる気宇を觀れば、黄河の水が一渦千里するようだ」という評語をつけている。毛沢東の文章は、「回覽」の二字をつけていつも掲示板に貼り出された。しかし、毛沢東の興味は、もうそのような所にはなかつた。彼は従兄弟が送つてくれた康有為と梁啓超に熱中していた。彼は「私は暗誦できるまでそれらを何度も読みました。私は康有為と梁啓超を崇拜し、私の従兄弟に非常に感謝しました」と語っている。

この時代の毛沢東が梁啓超のどのような思想に共感し、崇拜していたのか、一つの資料が残されている。現在韶山記念館に保存されている「新民叢報」である。その第四号「新民説」第六節の「国家思想を論ず」の部分に、毛沢東の書いた批注が残されている。梁啓超は、国家と政府の概念の相異を論じ、「国家は会社のようなものであり、朝廷は会社の事務所であり、朝廷の権力を握つた人は事務所の社長である。……両者の性質は異り、その大小軽重は逸脱してはならない。「朝廷の正式に成立した者（立憲を指す）は、国家の代表であり、朝廷を愛することは国家を愛することである。朝廷の正式に成立していない者は、朝廷が国家の害虫である。朝廷が国家を愛するのである」と言い、

「朕は国家なり」の観念は「大逆不道」であり、「忠君」に「愛国」を託する奴隷文人は「気狂いと言わざるをえない」と論じている。この部分に毛沢東は次のような批注を加えている。

正式に成立した者は、立憲の国家である。憲法は人民によって制定され、君主は人民によって推戴される。正式に成立しない者は、専制の国家で、法令は君主によって制定される。君主は人民が心から悦んでも服従する者ではない。前者は現在の英、日の諸国の如きものであり、後者は中国数千年来の国を篡奪した歴代の朝廷の如きものである。

この批注を読む限りでは、毛沢東は完全な立憲主義者であったかに見えるが、実際にはそこまで徹底してはいなかったようである。スノーには、この時代のことを次のように回想している。

私はまだ実際に反君主主義者ではありませんでした。私は皇帝も大部分の官吏も、正直で善良で賢い人たちだと考えていました。かれらはただ康有為の改革の援助を必要としていたのだと思います。私は古代の支配者の堯舜、秦の始皇帝、漢の武帝の話に夢中になり、かれらについて多くの本を読みました。

康梁が立憲君主制の主張者であったということもあるが、梁啓超の激越な啓蒙思想に共感しつつも、毛沢東は啓蒙思想に徹底してはいない。むしろ、「英雄史観」という中国の伝統的観念は、そのまま保持し続けている。「英雄史観」と「啓蒙思想」を混合させた観念を、この時代の毛沢東は、保持していたと思われる。この時代の同級生蕭三が伝える次のようなエピソードは、この時代の毛沢東の姿を鮮やかに浮かびあがらせている。毛沢東は蕭三から借りた「世界英雄豪傑伝」という本を返す時に、本の中の多くの圏点（文章の重要な部分にうっ、○のこと）を書きこんだことをわびつつ、次のような感想を述べたという。

中国にもこの様な人物（ワシントン、リンカーン、ナポレオン、ピーター大帝、カサリン女帝、ルソー、モンテス

キュー等の人物)が出なければならぬ。われわれは富国強兵の道を求めねばならぬ。そうしてこそ安南、朝鮮、印度の轍を踏むことをまぬがれることができる。中国には「前車の覆るは、後車の戒め」という諺がある。われわれ国民はみな努力しなければならぬ。顧炎武に「天下の興亡、匹夫に責あり」という立派な言葉がある。それからしばらくして、毛沢東は梁啓超の号「任公」にならって、自ら「子任」と名のつたという。

この蕭三が伝えるエピソードは、この時代の毛沢東の最大の関心が「救国」にあり、この任務を自らが担わねばならぬという強い自覚を持っていたこと、そして幼い心に深く刻みこまれていたあの英雄と同じように、自らを歴史を左右する人間に形成せねばならぬとする、一種の使命感に似た気持ちを持っていたことを語っている。このような大きな「志」を持つようになった毛沢東にとっては、憧れの東山高等小学校も、やはり小さすぎる世界であった。より大きく先進的な世界へ、より立派な学問を教える学校へ、毛沢東の心は省都長沙へと向う。毛沢東はその気持ちを、「この町は大きく、多くの住民と無数の学校と総督の役所があるということでした。まったくそこはりっぱなところでした。私はこのころ非常にそこへ行きたくて、湘郷人のための中学校に入学したいと思いました」と語っている。東山高等小学校では一学期を過ぎただけで、一九一一年春、長沙の湘郷駐省中学校へ入学することになる。東山高等小学校の国文教師賀鳳嵐が、湘郷駐省中学から招聘され赴任することになり、彼が毛沢東を連れて行ってくれたのである。

湖南省の省都長沙は、新しい空気のみなざる当時の中国では、最も先進的な都市の一つであった。湖南における新しい空気をもたらしたのは、変法運動であった。湖南省巡撫の煉宝箴、湖南省按察使の黄遵憲は、変法運動の闘士譚嗣同、康才常らと協力して、新時代をになう人材を養成する目的で、当時の最も革新的思想家梁啓超を総教習(学長)として招き、「時務学堂」を設立する。譚嗣同は更に、愛国の理、救亡の策を語り合う目的で、啓蒙的思想団体

「南学会」を設立する。会員数千数百人である。変法運動の中で作りあげられた革新の空気は、その後も継承されていく。革命の闘士黄興は、当時数多く設立された「洋学堂」の一つで、早くから革命の後進の指導に当たっている。一九〇七年までに湖南省全体で、設立された新式学校は、商業、実業、普通中学を合わせて八十二校、学生は一万三、四千人、長沙には、二、三十校が集まっていた。このような学校の一つで黄興は、後進の指導に当たっていたのである。長沙はこのように革新の空気のみならず、革命運動の一つの中心地であったが、同時に半植民地中国を象徴するような都市でもあった。一九〇五年から開港場として中国貿易が行われたので、長沙に面した湘江には、「日章旗」「星条旗」「ユニオンジャック」をかかげた軍艦が停泊し、河岸には「日清」（日本）「太古」（英国）「怡和」（英国）など外国会社のビルが建ち並んでいた。特に日本の会社は多く、在留する日本人が多かったので、「小日本」とよばれていたほど日本色が強いところであった。

十七才の毛沢東が生れて初めて出た大都会長沙とは、このような都会であった。ここで毛沢東は初めて近代文明にふれ、半植民地社会の現実を目のあたりに見、そして革命運動に接することになるのである。

湘郷中学校に入学した毛沢東は、「新聞」を読み始める。これは毛沢東の生涯の習慣となるものである。彼がこの時読んだのは、後に国民党の領袖となる于右任が編集する「民立報」である。この新聞により毛沢東は、孫文の同盟会の綱領を知り、黄興による黄花崗起義等の革命運動の消息を知るのである。「民立報」を読むことで、毛沢東の政治意識は高揚し、「救国」＝中国社会の改革を自分の使命とするという人生への決意は、非常にはっきりしたものとなっている。彼はこの学校で最初の「政治行動」を行うのである。壁新聞を学校の壁に貼り出すのであるが、その内容は、孫逸仙は新政府の大統領となり、康有為は國務総理に、梁啓超は外交部長に任命すべきだ、というものであった。彼自身の表現によれば「それはやや混乱した」ものであった。毛沢東は中国の改革を真険に考えてはいたが、そ

の方向と方法をめぐる「立憲法」と「革命派」の相違と両者の間にある深い亀裂と対立については、全く理解していなかったのである。政治への関心と情熱は高揚させていたが、それ以上のことについては、未だ理解力を備えていなかったと言わねばならない。このような毛沢東の前に展開したのが、清朝を崩壊させる、保路闘争から辛亥革命へと展開していく、中国政治の大激動であった。毛沢東は青年の情熱を傾けて、この政治の大激動の渦中に身を投じていくのである。

一九一一年四月清朝政府は、「鉄道国有化」政策を発表する。民間資本で建設された鉄道を国有化し、英、仏、独、米の銀行団から借り入れる借款の代償として売り渡そうというものである。まずその対象となったのが粵漢（広州―漢口）、川漢（四川―漢口）の二大幹線である。この清朝の政策に憤激した人々は、全国各地で「保路運動」と議会議を求め運動を展開する。四川省では大規模な武装闘争へと発展したし、湖南省でも数万人を集める抗議大会がもたれた。長沙の学生達はストライキで、抗議の意思表示を行った。湘郷中学では湖南省当局の干渉によって公然たる集会は開くことができなかったが、その時の様子を毛沢東は次のように述べている。「我々の学校は毎日門を閉ざして演説した。多くの同級生は、悲憤慷慨して革命を主張した。演説をしている一人の学生が、自分の長袍を脱いで、*“はやく軍事訓練をやり、戦争の準備をしよう”*と言ったのを憶えている」。このような熱狂した雰囲気の中で、毛沢東は自分の弁髪を切り、反清の意思表示をする。そして他人の弁髪も無理矢理に切る行動を起す。

「保路運動」は辛亥革命へと展開していく。同盟会が依拠したのは、秘密結社と「新軍」であったが、一九一一年一〇月の辛亥革命の導火線となった武昌での「新軍」の蜂起は、同盟会指導部は全く予想しないものであった。しかし、この武昌の武装蜂起は各地に波及し、ついに清朝皇帝を退位に迫りこみ、「辛亥革命」を成就させることになるのである。この辛亥革命の過程で湖北省の武装蜂起に最も素早く呼応したのが、湖南省であった。十月十日の武昌の

蜂起に続き、十月二十二日、長沙で革命派の軍隊が決起し、殆んど戦闘らしい戦闘もないまま市の占拠に成功する。その結果湖南における清朝権力は崩壊し、「中華民國湖南軍政府」が成立し、清朝からの「独立」を宣言する。この革命政府の主導権を握ったのが、革命派の指導者焦達峰と陳作新である。彼等はそれぞれ都督と副都督に就任する。しかし、湖南の地主、商業界等の指導層の擁護を受けた譚延闓はすぐ反撃に転じ、十月三十一日クーデターを決行し、湖南軍政府の実権を掌握する。この過程で焦達峰、陳作新は殺害され、革命派は権力から排除される一方、譚延闓が湖南軍都督に就任する。第一次譚延闓政権である。この譚政権を武力の面で支えたのが、武昌の革命政権を応援のため北上し、当時湖南にあった趙恒惕指導下の広西新軍部隊である。この趙指揮下の部隊の軍事力を背景に、譚政権は革命派がその兵士層に大きな影響力を持っていた湖南新軍を解体した。譚政権は北京政府とは独自の様々な改革を実行に移しており、革命政権としての性格も一面持っていたが、同時に旧体制の性格を引きずっていた。趙恒惕の軍隊に到っては、名目的には革命軍であったが、軍閥の軍隊とあまり変りないものであった。湖南省の革命は、こうして譚、趙の権力掌握をもって終ったのであった。

湖南省における辛亥革命の中で、毛沢東は「革命の完成を助ける決心」をして、学校をやめ兵士となっている。湘郷中学にある革命家が来て、校長の許可をえて、熱烈な愛国の演説をする。この演説を聞いて感激した毛沢東は、革命軍の兵士となる決心をするのである。黎元洪の革命軍の兵士となるため漢口へ行く準備をしている間に、長沙でも革命が起る。毛沢東はすぐに革命軍に入隊して兵士となる。そうして半年間ばかり新軍の兵士であったが、孫文と袁世凱による南北和議が成立し、戦争が回避されると、毛沢東は「革命は終わった」と考えて、軍隊をやめ勉学に帰ろうと決意するのである。

辛亥革命における毛沢東のこのような行動を見ていくと、この時代から彼が「救国」を自らの人生の大きな課題と

意識し、そのためには身を挺して行動する、熱血あふれる行動の人であったことがわかる。思想や理論を説くだけで自分の身体をかけた行動には踏みきれない口舌の徒ではないし、自己一身の安全や将来のみを考えて行動する保身の人でもない。彼は何よりも、自己の抱く信念のためには、自分の身体を賭して実行する。そのような誠実で、情熱的な、行動の人であったことを、この時代の行動は語っている。しかし、同時にこの時代の毛沢東の政治意識が、非常に未成熟なものであったことも示している。彼は辛亥革命における孫文と袁世凱の妥協、孫文の中華民国臨時大總統の退位と南京政府の解消の意味を、理解していなかったように思われるし、湖南における革命の推移についても、特別な見解は持っていない。将来、自分が闘うことになる趙恒惕とその軍隊についても、殆んど関心を示していない。辛亥革命について批判的でありうる程の政治的見解は、この時代の毛沢東は未だ持っていなかったのである。

軍隊での生活については、毛沢東自身が語る所によれば、給料七元の水を買うことと新聞に費やしたこと、兵士である鮎夫と鍛冶屋と仲良くなり、彼等に手紙を書いてやり、自分の「大学問」が尊敬されたこと、それに江亢虎の社会主義のパンフレットに夢中になり、同級生に手紙を書いたが、一人が賛成してくれただけであったこと、これくらいである。特別に重要な意味を持つと思われる事件はないが、社会主義との最初の出会いは、若干の注意は払う必要がある。江亢虎のパンフレットについては、ロバート・ペインは、これはイギリスおよび欧州大陸における社会主義の発展について概説したものであるが、オーエンやマルクスの名前も出てきて、一部の引用にはかなり当を得たものもあるが、現在この本を読めば、あまりの荒唐無稽さに思わず吹きだしてしまうかもしれない、と評している。汪澍白、張慎恒は、江亢虎の綱領は、教育平等、遺産の公有化、地税の徴集、労働の奨励等の八項目で、社会主義は、『多くは三代の井田制、学校制度及び孔子の「礼運」の主張する所と同じ道理だ』と主張していたと言っている。⁴これから察すると、科学的社会主義と言われるものの内容とは、ほど遠いものであったことは確かである。

毛沢東が江亢虎の主張から大きな影響を受けたとは考えられないが、毛沢東がそれに大きな関心を持ち、夢中になつたという事は、彼がこの頃から人類救済の思想へ敏感な感受性と触角を持つていたことを意味していよう。しかし、ただそれだけである。毛沢東の精神に大きな影響を与えることなく過ぎ去るのである。毛沢東が本格的に社会主義に関心を持つようになる時の社会主義思想とは、江亢虎それとは全く異質のものである。

毛沢東にとって長沙は、彼が大きな「世界」とつながる第一歩であつた。そしてこの中国革命運動の一つの中心で参加した辛亥革命は、その後の彼の人生そのものとなる革命闘争の最初の経験であつた。韶山沖を出た少年毛沢東には、これまでとは比較にならぬ大きな世界が広がっていたし、そこで展開される事件は、中国と世界の運動により直接結びついたものであつた。しかし、十八才の少年は、自分の周囲に展開している新しい世界とそこで生起する事件の内容と意味を、未だ十分には理解していなかつたように思われる。それは十八才の少年にとっては、当然の事である。彼は「救国」と「中国社会の改革」という大望を胸に抱きつつも、そのために自分が何を為すべきか、何を為しうるのか、この根本問題に見当すらつけないことができず、ただ立ちすくんでいるのである。こうして毛沢東にとっての彷徨と模索の時期が始まる。

五・彷徨と模索

新軍を退出した毛沢東は、自己の進路を決めかねて迷いに迷う。彼は警察学校、石鹼学校、法律学校、商業学校、公立高等商業学校に入学手続をしたり、入学科を払つたり、短期間在学したりしている。全く性質も方向も異なる学校の間で、その選択に動揺を重ねるといふことは、この時代の毛沢東には、自分の人生の進路について未だ定見がな

かったことをしめしている。動搖を重ねた末に、彼が選んだのは、省立第一中学であった。一元を払い登録し入学試験を受け、首席で合格する。しかし、省立第一中学校を選択したことにも、確たる根拠があったわけではない。学校の規則が厳しいのを嫌い、半年後には退学している。

この学校では国文教師胡汝霖が、毛沢東を非常に重視し、彼に「御批通鑒輯覽」を借し与えて読ましている。毛沢東の作文に「才氣人に過ぐ、前途限量^{はか}べからず」という称讚の評をつけたのは、彼であろう。国文教員が絶賛した毛沢東の作文は、今も残っており、この時代の毛沢東を知る貴重な資料である。「商鞅徒木立信論」という題名で、全文僅か六百字の短い文章である。この文章が材料としているのは、「史記、商君列伝」の中にある有名な話である。秦孝公から改革を任された商鞅は、改革の新法に対する民の信頼を確立する目的で、一つの布告を發する。国都南門に立っている棧を北門に移せば十両を与える、というものである。一見して馬鹿／＼しい布告を誰もが信用しない。そこで商鞅は十両を五十両に増やす。すると一人の男が実行する。商鞅はたちどころにその男へ五十両を与える。こうして民の法への信頼を確立してから、商鞅は新法を施行した、という話である。

毛沢東はこの史実を論じて、まず次のように始める。「われ史を読み、商鞅徒木立信の一事に至りて、わが国、国民の愚を嘆き、執政者の大変な苦心を嘆き、数千年來の民智の開けず、国の幾んど滅亡の悲惨に至るを嘆く」。続けて「立信」を論じ、法律と国民の関係を次のように言う。「法令は代りて幸福を謀る道具である。法令にして善く、その民を幸福にすること多ければ、わが民はまさにこの法令の布かれざることを恐れ、あるいは布かれても効力の生ぜざることを恐れ、必ず全力を盡くしてこれを保障し、維持し、つとめて完善の目的を達成せしめんとする。政府、国民の相互依存にどうして不信の理があるのか」。これと反対に、法令が善くなければ、政府と国民は対立し、民は法を信じないことになる。商鞅はどうであったのか。毛沢東は言う。「商鞅の法は良法なり。今試みに、わが国四千

余年の記載をひらいて、国民を利福せんとした偉大な政治家を求むれば、商鞅にまず指を屈す。なぜならば、商鞅は人民の権利を保障し、耕織を奨励し、国民の富を増大させ、軍功を尚んで国威を樹て、浪費を絶つこと等を意図しているからである。このように偉大な政策を實行するためにも、「立信」のための「徒木」というような事が必要であった。それはそれまでの法が悪く、民も法を信用していなかったからである。「民はこの民なり、法はあの法なり」という状態が続いてきたからである。このように論理を展開してきた毛沢東は、最後に次のように結論する。「われここにおいて数千年来の民智の暗黒、国のほとんど滅亡の悲惨に到る、由来あるを知るのである」。

毛沢東のこの小論文には、梁啓超の主張が反響している。梁啓超は中国の「積弱」の原因として、奴隸性、愚昧、怯懦、愛国心の欠如等の民族精神をあげ、中国の民族精神を痛罵しつつ、中国人が近代的人間、即ち「新民」として再生することを熱烈に主張したのであった。毛沢東の立論の基底にあるのは、この梁啓超の主張である。彼の中国人の愚昧とそれを生む政治の暗黒に、中国滅亡の原因があるとする主張は、全く梁啓超のものである。短い文章であるが、その中には鋭い才気と着眼、重厚な思考が見られ、後年の毛沢東を予感させるものがある。しかし、思想的には獨創性は未だ現れてはいない。この時代は、未だかつて熱中した康有為、梁啓超の影響下にあったことをしめしている。省立第一中学を退学した毛沢東が、省立湖南図書館に通い、敵復讐の西欧近代思想家の著作をむさぼるように読んだことは、決してこのことと無関係ではなかった。この時代の彼の関心と興味を中心にあつたのは「盛世危言」、康、梁の著作で知った西欧近代文明であった。韶山沖を出て東山高等小学校に入学した主要な動機は、そこにあつたが、この時代もその動機は持続していた。

第一中学を半年で退学した毛沢東は、毎日、省立湖南図書館へ通い、自習の生活を始める。この時代の生活について、毛沢東はスノーに次のように語っている。

この独学期間のあいだに私は多くの本を読み、世界地理と世界歴史を学びました。そこではじめて私は、非常な興味をもって世界地図を見て勉強しました。私はアダム・スミスの「国富論」、ダーウィンの「種の起源」ジョン・スチュアート・ミルの倫理に関する本を読みました。私はルソーの著作、スペンサーの論理学、モンテスキューの書いた法に関する書物を読みました。私は詩とロマンスをいっしょに読み、古代ギリシアの説話を読みました。またロシア、アメリカ、イギリス、フランス、その他諸国の歴史と地理を一所懸命勉強しました。

後年自ら「牛が野菜島へ入ったように」と形容したように、可能な限り、あらゆる本をむさぼり読んでいます。しかし、注目すべき事は、毛沢東の燃えるような知識は、全く西欧世界に向けられている事である。この事実は「盛世危言」によって触発された勉学への意欲と関心がいまだ持続し、彼の知的関心は全く西欧世界を知ることにあつたことを語っている。省立湖南図書館で毛沢東がどのような本を読んだか。彼の語つた所には一部間違ひもあるし、はっきりした書名を言っていない本もある。現在の研究では次のような本であつた事が解っている。

毛沢東は原書で読む程には外国語の実力を持っていなかったもので、彼が読んだのは厳復が翻訳したものであることは確実である。毛沢東はダーウィンの「種の起源」を読んだと言っているが、中国でその翻訳が出版されたのは一九二〇年であり、毛沢東が言っているのはハクスレーの「進化論と倫理学」の翻訳「天演論」（一八八九年出版）であつた、と考えられる。ミルの著作は当時中国では二種出ている。「論理学の体系―演繹と帰納」（厳復訳《穆勒各学》）と「自由論」（厳復訳《群己權界論》）である。ミルの倫理に関する本としたのは、論理学を誤つて伝えたものである。スペンサーの著作は「社会学研究法」（厳復訳《群学疑言》）であり、モンテスキューの著作は「法の精神」（厳復訳《孟德斯鳩法意》）である。ルソーの著作を厳復は翻訳していないが、ルソーは梁啓超が大きな影響を受けた思想家であり、毛沢東も「民約論」などの著作を読んだのであろう。

このような西欧近代思想の代表的著作を読むことによって、毛沢東もそれから影響を受けたことは確実である。後に親友蕭子昇への手紙に、スペインサーの「社会学研究法」の読後感を、「学問する道はここにある」「実は社会学に限らず、いろんな学問の学習法にも見るべきものがある。」と書き送っている。また敵復訳「天演論」の有名な言葉「物競天演」は、毛沢東の近代世界を見る眼を開くことになった。敵復は「進化論」に依拠して、「早い変計」「今にとめて古よりよくする」ことが、救亡図存の唯一の出路だととして、「民力を鼓舞し、民智を開き、民徳を新しくする」ことを主張した。このような思想は「新民学会」に連なるものであり、青年毛沢東に与えた影響の大きさが推測される。このように西欧近代思想から受けた影響は、決して小さなものではなかったが、しかし、それは毛沢東の人生の方向を決定する程には大きなものにはならなかった。彼は相変わらず自己の進路を決めかねて迷っている。この時代の毛沢東の姿を象徴的に伝えるものは、彼が四十数年後の一九五一年秋に、北京で勉強している湖南省出身の学生に語った次のような言葉であろう。

湖南図書館の壁には世界大地図が掛かっていた。私は毎日その前を通る度に、いつも立って眺めていた。これまで私は、湘潭県は大きく、湖南省は更に大きく、中国は古より天下を称してきたのだから当然大きく、大したものだと考えてきた。しかし、この地図で見れば、中国はほんの世界の一部分を占めるにすぎず、湖南省は更に小さい。湘潭県は地図の上では見えず、韶山は当然ながら影すらない。世界はもともとこのように大きいのだ。この言葉に続けて毛沢東は、韶山沖から全世界に到るまで苦しい生活をしている人が多く、不合理な社会は徹底的に改造しなければならぬと語り、次の言葉で結ぶ。

世界の変化は、自然に起るものではない。必ず革命を経、人間の努力を経なければならない。私はだから思った。我々青年の責任は重大であり、我々の為さねばならぬ事は多く、歩まねばならぬ道は長いと。この時から私は全中

国の苦しんでいる人、全世界の苦しんでいる人のために、自己のすべての力を捧げようと決心した。¹⁰

後年の回顧談であるから、そこに潤色が入るのは免れ難い。一九二二年の毛沢東は、漠然と世界は変革しなければならぬと考えていたことは間違いないが、それが明確に「革命」という像を結ぶまでには到っていない。しかし毛沢東が世界の大きさを思い、自分の為さねばならぬ事の多さと、歩まねばならぬ道の遙かさを思った事は確かであろう。

正義感に富む多感な少年毛沢東は、みじめな中国の現実と苦しんでいる人々に思いを寄せ、世界のそのような人々の事も想像し、自己の使命感に武者振りするような戦慄にとらわれたのかもしれない。西欧近代思想の世界にふれた毛沢東も、世界地図を眺めた時と同じ感慨にとらわれたのであろう。地理的な世界の大きさではなく、「知」の世界の大きさを知り、大きな衝撃とともに、強烈な刺戟を受けたのである。西欧人の作りだした「知」の世界の豊かさと多様さ、その前に毛沢東は立ちすくみ、これから自己が吸収しなければならぬ「知」の世界の大きさに、烈しく知識欲を燃やしたのであろう。このような状態であるから、図書館での勉強が、毛沢東の人生の方向を決定するものにならなかったのは当然である。彼はまず何よりも知ること、情熱をもやしていた。できることなら、十分な時間をかけて心ゆくまで勉強したかったに違いない。しかし、学校に入学しなければ、学費の補助を打切るという父親の通告は無情であった。毛沢東はこの父親の通告によって、彼にとつては一種の「至福の時」であった生活に別れを告げること余儀なくされる。彼は友人の分まで替玉をやり三つの入学論文を書き一九一三年春、省立湖南第四師範に入学する。師範学校への入学は、毛沢東の少年時代―彷徨と模索の時期の終焉であり、彼の最も充実した人生の一時期の始まりであったが、この決定はあくまでも父親の通告という外的事情によって半ば迫られたものであって、彼自身の明確な目的意識に基づく主体的な選択では決してなかった。この事情を毛沢東はスノーに「私は自分の『生活』をまじめに考えました。そして私は教職にいちばん適している、と定めこもうとしました」と語っている。彼はまた広告を読み

始め、授業料が無料で、寄宿料も安いという魅力的な師範学校の広告を発見し、そこに入学を決意したのである。「救国」という大望は胸に抱いているが、具体的にどう生きるべきなのか、毛沢東はこの時代は未だ方法を見出しかねていた。当然のこと「革命家」という方向は未だ定めてはいない、しかし、半ば強いられた選択として入学した第四師範（後に第一師範に合併する）の生活は、非常に充実したものであった。この時期に毛沢東の人生の方向は揺がぬものとして確立されることになるのである。

六、考察

革命家毛沢東は、彼が天性を持っていた人間的諸資質と、後天的に獲得した諸観念の複合的な展開としてあると考えられるが、この稿を終えるに当って、最後に革命家毛沢東を生んだ人間的資質という問題に焦点を絞って考察を加えておきたい。人間の天賦の性格や資質は、幼少年期に最も純粹に現れてくるものであるが、毛沢東にもその事は言え、彼の幼少年期のエピソードの中には、後年の革命家を予想させる幾つかの人間の資質を見ることができ。

幼期の毛沢東にとって最大の存在は母親であり、彼は母親の強い影響下にあった。それだけでなく、彼の風貌が、母親のものであるように、彼は母親から人間的資質としても大きなものを受けている。この母親は敬虔な仏教信者として深い「慈悲の心」の持主であった。彼女はそのような心を持つだけでなく、父親に隠れて貧しい人々を救い、その心を周囲の人々に及ぼした。毛沢東は母親のこの心を強く受けている。彼も幼時母親と一緒に協力し合い、困った人を助けている。革命家毛沢東を生む根源にあるのは、この精神、仏教では「慈悲」と言い、儒教では「惻隱の心」と表現し、近代ではヒューマニズムと言うような、人間への深い愛情であったことを、われわれは決して忘れて

はならない。この精神は最初は級友と弁当を分けて食べたり、自分の授業料を貧しい人に与えたりする程度のものであったが、社会の不正や不合理を知ることにつれて、彼の中にある強い正義感と相まって、「社会正義」の追求や叛逆への共感という形に生長していつている。長沙の米騒動や哥老会の謀反という社会的事件の見聞を通して、毛沢東のヒューマニズムは、明かに叛逆者への同情と共感という性質を帯びていくのである。毛沢東の鋭い感受性は、社会的に糾弾される謀反者の側に、「人間的正義」があることを、敏感に感じとっている。普遍的な人間への愛情は、抑圧された貧困者の側に立った、強者や社会への抗議という形をとるようになっていくのである。未だ「階級」や「階級闘争」を意識するまでにはなっていない。しかし、人間関係の不平等と社会の不合理の意識化は、毛沢東の精神にとつては大きな転換であった。それは同時に、毛沢東の母親の影響からの自立の第一歩であった。彼の人間への愛情は、再び母親の「慈悲の心」に回帰することはない。それは時間の経過とともに、益々闘争の色彩を強めていく。

人間に対する愛情とともに、少年毛沢東の特徴的なもう一つの精神は、やさしさとは対照的な強固で、強烈な自己意識であった。父親への反抗や家出のエピソードが語るものは、毛沢東のこの強烈な自己意識の存在である。十歳の子供が教師に反抗して家を出し、三日間も山の中をさまよい歩くというのは、どこにでもある話ではない。このエピソードは、毛沢東の将来の性格を語っている。彼の中には自己を殺し、屈服を続けることを潔しとしない強烈な自己意識がある。この自己意識は、自己を貫徹し、自己実現をはたすまで、強烈な自己主張を続けていくものである。どのような偉大な権威に対しても、「天」に対しても、自己を主張し、敢然と挑戦していく程にそれは強烈なものである。毛沢東の中には、そのような強烈な自己主張が存在している。大業を成しとげる人間が具備すべき基本的人間の資質として、強固な自己意識と大胆な実行力をあげねばならないであろうが、毛沢東には幼年からその人間的資質の存在を認めることができる。内面から湧き上ってくる精神の生命力とでも言うべきものとして、この強い自我は

あるのである。毛沢東のそれは、常人の数倍する桁外れに強烈なものとしてあるのである。

毛沢東のこの強烈な自我意識と、それと対照的なやさしい人間への愛情が結びつく時、彼の行動は明かに「反逆」の性格を帯びていく。それは最初は父親の命令に反抗するという程度のものであったが、彼が成長していき、社会意識も拡大していくにつれ、反逆の対象は、次第に大きなものへと変わっていく。すると彼は次第に「革命家」へと接近していくのである。反抗の対象となったのは、父親の次は、一族の族長であった。毛沢東は自分の不正利得を隠して、「喫大戸」運動の指導者を捕え、殺害しようとしている族長を、村の貧民とともに糾弾し、指導者を釈放させることに成功する。毛沢東にとっての最初の社会的「造反」である。「救国」を意識するようになった毛沢東の視野は、国家の政治と社会へと急速に拡大していくが、こうなると彼の行動は、「政治的反逆」の性格を帯びてくる。その最初の行動は、湘郷中学における「大字報」の発表であった。その内容は変法派と革命派を混同した政治的には未成熟なものであったが、重要なことは、毛沢東が中国の政治の変革の必要性を強く主張したことである。中国の政治の変革こそが、中国にとって最も根本的な問題であり、自己の任務もそこに力を盡すことにある、と毛沢東は認識しているのである。この毛沢東の認識は、それ以後変えることはない。それ以後の毛沢東はこの認識を忠実に実践するという形で行動している。「保路運動」では、率先して弁髪を切り、反清の態度表明するとともに、積極的に運動に参加している。そして辛亥革命では、「革命を助ける」ために、希望して入学した中学を退学して、「革命軍」の兵士となるのである。

このように毛沢東の行動は一貫している。後は自らの心に忠実に想念を追求する。そして自ら信じた事は、確実に実行する。このようにして「謀反」に共感した毛沢東の行動は、ますます「反逆」の性格を濃くして、ついに当時では最も激しいものであった「革命」に行きつき、それに参加するまでになっているのである。後年の毛沢東からすれば、

政治思想においても、行動においても、言うに足りるものではない。しかし、当時においては、最も革命的な行動であり、毛沢東が自己の人生の選択と決断において、自己の信念に忠実であるとともに、非常に大胆であったことは否定することはできない。この時代までに毛沢東の人生の方向は、ほぼ定まっていたと考えてもよい。自己の人生の大目標としての「救国」―「変革」という課題と、そのために「反逆者」として生きていくという、毛沢東の人生の大きな方向は定まっていた。毛沢東の想念の追求は、このようなものとして形をなしている。

このような毛沢東の自己の人生と生き方の探求において、一つの注目すべき特徴がある。それは彼が自分一身の出世や成功への考慮を、殆んどしていないことである。当時、科挙制度が崩壊してしまっていたので、従来のような公認の出世街道は存在しなくなっていた。このことの影響もなくはないであろう。しかし、そうであっても他に外国留学を目指すとか、学者や詩人として名を成すという道もあったはずである。一般的に自己一身の成功や出世への配慮は、人間を慎重にし、場合によっては臆病にさえもするのであるが、毛沢東にはそのような事を考慮した形跡は、殆ど認められないのである。彼が自己の人生を考えるのは、自己の考える「正義」や国家の大事のために、自己がどう行動するかという形においてであった。国家や社会と自分との間がストレートに結びついており、その間に自己一身の利害や安全といった要因は、殆んど存在していない。それが非常に大胆と思える彼の行動を導き出しているのである。

これまでもそうであったし、これ以後もそうであるが、「自己一身への配慮の欠如」という事は、毛沢東の思考の大きな特質の一つである。それは毛沢東の人間としてのスケールの大きさを生む原因となっているが、この思考型はもともと、彼の「英雄史観」に由来するのである。彼が少年時代に愛読し、魂に深い影響を受けた講談本は、英雄豪傑の物語であった。そこに登場する英雄豪傑達は、ある者は胸におさめた深い智謀によって天下を動かし、ある者は

身を捨てて天下に大義を実現することにつくした。どの人物も人並み外れた傑出した能力の持主であり、自己のためだけではなく、大きな天下のために生きた。毛沢東にとつての憧れの人物は、そのような英雄豪傑になることであった。英雄豪傑との自己同一化の願望、それは毛沢東の中にある最も強い欲望の一つである。毛沢東の考える「自己」とは、このような英雄豪傑としての「自己」なのである。英雄豪傑とは天下の大事や社会の大義のために生きるものであつて、些々たる一身の小事のために生きるものではない。毛沢東もそう考えている。彼の国家の大事と自己をストレートに直結し、大胆に行動していくという思考と行動の型は、まさに「英雄史観」のそれなのである。毛沢東は自己一身の成功や出世に全く無関心だったのではない。彼の考える自己とは、自分のことだけを考える「小さな」自己ではなく、大英雄としての「自己」であつた。「英雄史観」は、革命家毛沢東を生むための精神的基盤であつたのである。最後に革命家毛沢東を生んだ最大の要因として「時代」をあげねばならないであろう。安定した平穏な時代であれば謀反に共感する強い正義感を持ち、英雄豪傑への大望を抱く少年は、単なる「反逆者」か、あるいはせいぜいの所、危険思想家で終るのが宿命であつた。実際には「反逆者」となつたかどうかは別にしても、毛沢東の烈しい個性とあふれるような野性の情熱は、定型的な社会の枠内におさまりきらなかつた事は確かである。しかし、この毛沢東に時代は微笑んだのである。中国はまさに一つの時代が終焉し、次なる時代を生み出す、生みの苦しみの中に呻吟している時であつた。このような動乱期こそは、毛沢東の天性の魂に最もふさわしい時代環境であつた。毛沢東はこの時代の中で、自己の才能を最大限に展開する事で、不世出の革命家へと成長していくのである。その具体的内容と過程は、われわれの次なる課題である。

註

一、故郷と家系

- (1) (新湘評論) 編輯部「毛沢東同志的青少年時代」中国青年出版社(一九七九年) 一頁
- (2) 季湘文編著「毛沢東家世」南粵出版社(一九九〇年) 六頁
- (3) 美・特里尔著「毛沢東伝」河北人民出版社(一九八九年) 三頁
- (4) 以上の記述は②、①二頁、辛子陵著「毛沢東全伝①」利文出版社による。
- (5) 蔣国平「毛沢東与韶山」中国青年出版社(一九九三年) 三九―四一頁
- (6) 毛沢東「湘江評論創刊宣言」竹内実編「毛沢東集①」蒼々社(一九七二年) 五六頁
- (7) 岩波文庫に同名の本としてある。

二、家庭と資質

- (1) 以上の叙述は、季湘文前掲書 二七―二八頁
- (2) 同前
- (3) エドガー・スノウ「新版 中国の赤い星」筑摩書房(一九六四年) 九四頁
- (4) 宇佐美誠次郎訳
- (5) 同前
- (6) 趙大超「毛沢東和他的父老郷親」湖南文艺出版社(一九九二年) 一五三―一五四頁
- (7) 以上の文七妹の記述は季湘文前掲書 三七―四〇頁による
- (8) スノー前掲
- (9) 李銳「学生時代の毛沢東」時代の報告 一九八三年第一二期 五頁
- (10) 彭大成「湖湘文化与毛沢東」湖南出版社(一九九一年) 一〇五頁より再引用
- (11) 彭大成前掲 一〇五頁
- (12) 劉濟昆編「毛沢東詩詞全集詳註」 二一頁
- (13) 香港崑崙製作公司出版(一九九二年) 六頁
- (14) 高菊村等著「青年毛沢東」中共党史資料出版社(一九九〇年) 九三―九五頁
- (15) スノー前掲

- 季湘文前掲 三〇頁
- 曾維東、嚴帆「毛沢東的足迹」群衆出版社（一九九三年） 五頁
- 高菊村等前掲 九頁
- 趙志超前掲 一〇五頁
- 蕭三「毛沢東同志的青少年時代和初期革命活動」中国青年出版社（一九八〇） 十五頁
- スノー前掲 九四頁
- 19 毛沢東の形式上の妻となった羅氏は毛家に嫁いで来て嫁としての仕事をし、文氏を助けている。身体が弱く、実家へ歸ることが多かった。一九一〇年二月病気で亡くなっている。季湘文前掲 七五頁
- 20 季湘文前掲 三九頁
- 21 同前 四〇頁
- 22 同前 三三頁
- 23 蔣国平前掲 七五頁
- 24 その一つに毛沢東の国際秘書であった林克の証言がある。邦訳「毛沢東の人間像」サイマル出版社（一九九四年） 五八―九〇頁
- 25 高菊村等前掲 一四―一五頁
- 26 スノー前掲 九六―九七頁
- 27 高菊村等前掲 一五頁
- 28 スノー前掲 九七頁
- 29 同前 九八頁
- 30 蔣国平前掲 八六―八八頁
- 三・私塾生活と「志」の形成
- (1) 蔣国平前掲 六二頁
- (2) 曾維東等前掲 五頁
- (3) スノー前掲 九三頁
- (4) 趙志超前掲 四〇三頁

- (5) 高菊村等前掲 九頁
- (6) 趙志超前掲 一〇六頁
- (7) 「韶山老人座談会紀要」高菊村等前掲より再引用 十頁
- (8) 同前 十頁
- (9) 趙志超前掲 一〇七―一三三頁
- (10) 「毛選」中の左伝の引用は三十以上になる。李銳「毛沢東早年讀書生活」遼寧人民出版社 一六一頁
- (11) (7)に同じ 十一頁
- (12) 趙志超の引用文による 一〇頁
- (13) 劉濟昆前掲 二頁
- (14) 同前 二頁
- (15) 年令は中共中央文献研究室編「毛沢東年譜」は数え年で数えられているが、ここでは毛がスノーに語ったように満年令で数える。 六頁
- (16) 曾維東等前掲 九五頁
- (17) スノー前掲 一九頁
- (18) 「三国志演義」立間祥介訳徳間文庫(一九八三年) 2 一八二頁
- (19) 「水滸伝」清水茂訳岩波文庫(一九七七年) 十一頁
- (20) 竹内実「毛沢東伝」毛沢東ノート 新泉社(一九七一年) 九六頁
- (21) 高菊村等前掲 十一頁
- (22) スノー前掲 九六頁
- (23) 馮桂芬「西学を採るの議」邦訳「原典中国近代思想史」第二冊岩波書店(一九七七年) 五八頁
- (24) 趙志超前掲 一二七―一二八頁
- (25) スノー前掲 九八頁
- (26) 〃 九六頁
- (27) 趙志超前掲 一一〇頁
- (28) 同前 一二四―一二六頁
- (29) 趙志超前掲 一三二頁

- (33) スノー前掲 九八頁
 (32) 同前 九八頁
 (31) 蔣国平前掲 三一頁
 (30) この詩は湘郷から長沙へ出る時表兄文達君、塩泉へ送ったものだという説もある。劉濟昆前掲 四頁
- 四・世界への旅
- (1) 曾維東等前掲 七頁
 (2) 趙志超前掲 一三三―一三三頁
 (3) 同前 一三四頁
 (4) スノー前掲 九九頁
 (5) 李銳「早年毛沢東」遼寧人民出版社（一九九三年） 一八一―一九頁
 (6) スノー前掲 一〇〇頁
 (7) 蕭三「毛沢東同志的青少年時代」中国青年出版社（一九七九） 一〇四頁
 (8) スノー前掲 一〇〇頁
 (9) 李銳前掲 一八頁
 (10) 「本会総記」湘江評論第四号、汪澍白、張慎恒「毛沢東早期思想探原」中国社会科学出版（一九八三年）四五頁より再引用 一〇一頁
 (11) 以上の記述は塚本元「中国における国家建設の試み」東京大学出版会（一九九四年） 三九頁による
 (12) スノー前掲 一〇二―一〇三頁
 (13) ロバート・ペイン「毛沢東」角川文庫（昭和四二年） 四〇頁
 (14) 宇野光雄訳 四九―五〇頁
 汪澍白、張慎恒前掲
- 五・彷徨と模索
- (1) スノー前掲 一〇三―一〇四頁
 (2) 「資治通鑑」に乾隆皇帝が御批を加えたのを集めた本。清朝の歴史への観点を示すものである。

- (3) 高菊村等前掲 二二頁
- (4) 全文は李鋭「前掲『毛沢東早年読書生活』」 五一―五二頁にある。
- (5) スノ「前掲」 一〇五頁
- (6) 蕭三前掲「毛沢東同志的青少年時代」 五二頁
- (7) (4)に同じ 七一―七二頁
- (8) 同前 一〇頁
- (9) 汪澍白等前掲 五五―五六頁
- (10) 周世釗「毛主席青年時代の幾個革命」一九五八年 新苗第九期 蕭三「6」 三五―三六頁より再引用
- (11) スノ「前掲」 一〇五頁